

地域への愛着によって促される地域活動の参加傾向

渡 辺 由 希[※]

住民の地域活動への参加には、地域への愛着が影響していることが先行研究から明らかにされている。本研究は、千葉県千葉市緑区おゆみ野地域における地域活動の参加を規定する要因の検討を行った。地域への愛着を規定する要因として近所づきあい（社会的環境との接触）と公園・遊歩道の利用頻度（物理的環境との接触）を、地域活動への参加を規定する要因として地域への愛着を想定し、重回帰分析およびロジスティック回帰分析を行った。その結果、地域愛着（物理的環境）は地域の物理的要因と社会的要因の両方が影響し、地域愛着（社会的環境）は地域の社会的要因が影響していた。また地域活動の参加には、主に地域愛着（社会的環境）が影響しており、地域活動のなかでも現在の生活をよりよくするような活動に強く影響していた。

キーワード：地域活動，地域愛着，近所づきあい，公園・遊歩道

1. 問題と目的

核家族化や少子化が進むわが国において、住民の地域活動への参画がコミュニティにとって必要となってきた。そんな中、地域活動への動機として、あるいはソーシャル・キャピタルのひとつとして地域愛着が注目されており、地域活動への関与に多様な影響を及ぼすことが指摘されている（鈴木・藤井，2008a；鈴木・藤井，2008b）。

鈴木ら（2008a）は、交通行動による風土との接触の水準の差違が、地域愛着の醸成に影響を及ぼすプロセスと、地域愛着の醸成が地域への態度や協力行動へと影響を及ぼすプロセスを共分散構造分析によって検討した。その結果、地域愛着の中でも当該地域に対して慣れ親しんだものに深くひかれ離れがたく感じる程度（地域愛着（感情））が高いと、町内会活動に熱心であったりまちづくりに熱心であることが明らかにされた。地域愛着の醸成は年齢や居住環境などの個人属性の他、生活環境の評価や日常生活などに影響を及ぼされることが示唆された。石盛（2004）

※ 淑徳大学大学院総合福祉研究科社会福祉学専攻博士後期課程修了，淑徳大学総合福祉学部兼任講師

も鈴木ら（2008a）の結果と同様に、地域愛着が高い人ほど居住継続意志や連帯感、地域活動へ積極的に参加する意思が高い傾向を示した。

こうした地域愛着を規定する要因として、地域の物理的環境と社会的環境が考えられている（引地・青木・大淵，2009；Brown, Perkins & Brown, 2003）。引地ら（2009）によれば、地域の物理的環境に対する評価が高い人ほど地域に対する愛着が強いこと、地域の社会的環境に対する評価が高い人ほど地域に対する愛着が強いこと、社会的環境に対する評価は物理的環境に対する評価に比べて、より愛着を高めうること、地域環境に対するこれらの評価は、居住年数以上に愛着形成を促すことが明らかにされている。ここでの物理的環境に対する評価は、景観、歴史的風景、ランドマーク、医療施設、特産物から構成されており、社会的環境の評価は、住民との交流、イベント、住民の人柄、治安の評価から構成されている。物理的環境の評価のうち景観や医療施設が地域への愛着を高め、社会的環境の評価のうち住民の人柄や住民の交流が地域への愛着を高めていた。またBrown et al.（2003）は、落書きなどのある住居、街や道路などの景観、地域内の物理的環境の荒廃や治安の悪化が住民の地域愛着意識を低下させること、ならびに、近隣住民との日常的な接触度が高いほど地域愛着意識が高いことを報告している。以上のように、地域愛着の形成には当該地域の物理的環境と社会的環境の2つの要因が影響していることが考えられる。すなわち、物理的環境→地域愛着、ならびに社会的環境→地域愛着という影響関係である。

これらのことから、次のような影響関係が考えられる。すなわち、住民による地域活動への参加には地域への愛着が影響し、地域への愛着には当該地域の物理的環境の評価ならびに社会的環境の評価が影響する、ということである。しかしながら、一口に地域活動といってもその種類はさまざまであり、先行研究では地域愛着がどのような地域活動への参加を促すかは詳細に検討されていない。倉沢（2002）は、地域活動を問題解決型活動、社会奉仕型活動、自己実現型活動の3つに類型化しており、各々の地域活動の目的や内容は異なるものであると述べている。このことから、地域愛着が影響を与えうる（あるいは与え得ない）地域活動とは何であるかを明らかにすることは、より具体的な地域活動への参加を促進させる方法を考えるにあたって有意義であると考えられる。

そこで本研究では、住民の地域愛着意識がどのような地域活動への参加を促すかを探索的に検討することを目的とし、住民の地域活動への参加に関して地域への愛着が規定因となりうるか否か、また当該地域への物理的環境および社会的環境の評価が地域への愛着の規定因となりうるか否かを検討する。なお、本研究は平成28年度淑徳大学コミュニティ政策学部・社会調査実習（担当教員：青柳涼子、本多敏明、渡辺由希）にて行われた調査の一部を報告するものである。

2. 方 法

調査方法

千葉県千葉市緑区おゆみ野の一部地域（特定の町丁目）における、タウンプラス（日本郵便による郵送サービス）を利用した全戸配布、および郵送回収。世帯内での回答者の選定法はバースデー法による。

調査対象者

千葉県千葉市緑区のおゆみ野在住の20～79歳の男女。2017年（平成29年）3月末日付けの住民基本台帳の集計結果（千葉市、千葉市緑区、千葉市緑区おゆみ野地域）はTable1の通りである。千葉市、千葉市緑区、千葉市緑区おゆみ野地域それぞれにおいて、男女比率に大きな違いは見られない。なお、同日付けの住民基本台帳による世帯数は、千葉市で446,363世帯、千葉市緑区で52,668世帯、千葉市緑区おゆみ野地域で18,807世帯であった。

Table1 千葉市・千葉市緑区・千葉市緑区おゆみ野地域の人口総数（2017年）

	千葉市	千葉市緑区	千葉市緑区 おゆみ野地域	調査対象地域
2005年	917,521	112,228	38,595	2,635
2010年	955,022	121,076	45,130	2,633
2015年	962,554	126,726	48,302	2,583
2016年	964,830	127,429	48,654	2,626

（単位：人）

調査時期

平成28年6月24日～7月17日

回収率

1,100通のうち有効回答272通（回収率24.7％／男性41.0％、女性59.0％／20代7.4％、30代12.2％、40代15.6％、50代18.5％、60代25.6％、70代20.8％）。

調査項目

調査全体では、以下のa～mの項目を設定した。

- a) 公園の利用頻度に関する1項目、および利用目的に関する付問1項目
- b) 遊歩道の利用頻度に関する1項目、および利用目的に関する付問1項目
- c) 公園のあり方に関する3項目
- d) おゆみ野地域の地域活動に関する活動認知、および活動経験に関する10項目
- e) 地域防犯活動認知に関する5項目
- f) 地域防犯活動に対する活動経験および活動意欲に関する1項目
- g) 地域防犯活動に対する是非に関する1項目
- h) 近所づきあいに関する5項目
- i) 地域の満足度に関する18項目

- j) 地域への愛着に関する11項目
- k) 健康意識に関する9項目
- l) 日常生活における不安に関する6項目
- m) 学生時代の授業内容に関する8項目

その他、フェイス項目として性別、年齢、配偶関係、家族構成、小学生以下の子どもの有無、居住形態、居住年数を尋ねた。このうち本研究では、当該地域の物理的環境要因としてa) 公園の利用頻度に関する項目とb) 遊歩道の利用頻度に関する項目を用い、社会的環境要因としてh) 近所づきあいに関する項目を用いる。その他、d) おゆみ野地域の地域活動に関する活動認知および活動経験に関する項目、i) 地域への愛着に関する項目、を使用する。

倫理的配慮

本研究の実施にあたっては「淑徳大学 研究倫理規準」に基づいて倫理的配慮を行った。本研究で用いたデータは、上述の通り平成28年度「社会調査実習」（淑徳大学コミュニティ政策学部コミュニティ政策学科正課科目）で実施した調査で得られたものである。調査票の配布にあたって利用した日本郵便によるタウンプラスは、指定した地域内の配達可能なすべての箇所に郵送するシステムであり、調査対象者抽出のためのサンプリングを要しない。したがって、筆者を含む今回の調査者は、調査対象者の「氏名」「町丁目以下の住所」を把握しておらず、それら個人を特定する情報と連結不可能な状態で「性別」「年齢」「学歴」等の情報を調査票から得ている。当然のことながら、調査票に同封した調査協力依頼文には、調査目的、データの利用方法、公開の仕方等について明記しており、また返送は郵送法によることから、調査協力は任意であった。

3. 結 果

3-1. 各変数の基礎集計

まず分析に用いる各変数の基礎集計として、クロス集計の結果を示す。

おゆみ野地域の地域活動に対する活動経験

おゆみ野地域の地域活動を次の10種類に分類し、それぞれについて活動経験および活動認知を尋ねた。すなわちa) 健康や医療サービスに関係した活動、b) 高齢者を対象にした活動、c) 障がい者を対象とした活動、d) 子どもを対象とした活動、e) スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動、f) まちづくりのための活動、g) 安全な生活のための活動、h) 自然や環境を守るための活動、i) 災害に関係した活動、j) 国際協力に関係した活動、である。活動経験は「参加したことがある」、「参加したことがない」、「参加したことがないが今後参加したい」の3件法、活動認知は「知っている」、「知らない」の2件法で尋ねた。なお本研究では活動経験に対する回答のみを扱う。各種地域活動に対する参加経験の基礎集計の結果をTable2に示す。

Table2 各種地域活動に対する参加経験の基礎集計

		参加した ことがある	参加した ことがない	参加したことが ないが今後 参加したい
a) 健康や医療サービスに関係した活動	(n=262)	22.9%	67.6%	9.5%
b) 高齢者を対象とした活動	(n=260)	8.5%	80.8%	10.8%
c) 障がい者を対象とした活動	(n=253)	2.0%	91.3%	6.7%
d) 子どもを対象とした活動	(n=259)	17.8%	73.4%	8.9%
e) スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動	(n=264)	39.8%	50.0%	10.2%
f) まちづくりのための活動	(n=262)	54.2%	36.6%	9.2%
g) 安全な生活のための活動	(n=260)	16.9%	75.0%	8.1%
h) 自然や環境を守るための活動	(n=260)	18.1%	71.9%	10.0%
i) 災害に関係した活動	(n=258)	38.4%	48.4%	13.2%
j) 国際協力に関係した活動	(n=249)	0.8%	88.8%	10.4%

Table2より、地域活動の種類によって参加経験の有無にばらつきがみられた。参加したことがある割合が最も高かったのは、「まちづくりのための活動」の54.2%で、次いで「スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動」の39.8%、「災害に関係した活動」の38.4%と続いた。反対に、参加したことがある割合が最も低かったのは「国際協力に関係した活動」であり、次いで「障がい者を対象とした活動」であった。

次に男女別の参加経験をクロス集計した結果をTable3に示す。ただし、各セルのサンプルサイズが小さくなるため、フィッシャーの直接確率検定のp値を参照した。

Table3 男女別にみた各種地域活動に対する参加経験

		参加した ことがある	参加した ことがない	参加したことが ないが今後 参加したい	p	
a) 健康や医療サービスに関係した活動	男性 (n=107)	18.7%	72.9%	8.4%	0.357	n.s.
	女性 (n=154)	25.3%	64.3%	10.4%		
b) 高齢者を対象とした活動	男性 (n=107)	6.5%	79.4%	14.0%	0.324	n.s.
	女性 (n=152)	9.2%	82.2%	8.6%		
c) 障がい者を対象とした活動	男性 (n=106)	0.9%	94.3%	4.7%	0.489	n.s.
	女性 (n=146)	2.1%	89.7%	8.2%		
d) 子どもを対象とした活動	男性 (n=107)	12.2%	80.4%	7.5%	0.103	n.s.
	女性 (n=151)	21.2%	68.9%	9.9%		
e) スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動	男性 (n=108)	38.9%	50.9%	10.2%	0.983	n.s.
	女性 (n=155)	40.0%	49.7%	10.3%		
f) まちづくりのための活動	男性 (n=107)	43.9%	46.7%	9.4%	0.015	*
	女性 (n=154)	61.0%	29.9%	9.1%		
g) 安全な生活のための活動	男性 (n=107)	17.8%	72.9%	9.4%	0.690	n.s.
	女性 (n=152)	15.8%	77.0%	7.2%		
h) 自然や環境を守るための活動	男性 (n=107)	14.0%	74.8%	11.2%	0.413	n.s.
	女性 (n=152)	20.4%	70.4%	9.2%		
i) 災害に関係した活動	男性 (n=106)	40.6%	46.2%	13.2%	0.785	n.s.
	女性 (n=151)	36.4%	50.3%	13.3%		
j) 国際協力に関係した活動	男性 (n=103)	0.0%	90.3%	9.7%	0.903	n.s.
	女性 (n=145)	0.7%	88.3%	11.0%		

* : $p < .05$ (但し Fisherの直接確率検定)

Table3より、「まちづくりのための活動」に男女による有意差が見られた ($p < .05$)。男性の「参加したことがある」の割合が43.9%であったのに対し、女性の「参加したことがある」の割合は61.0%と半数を超えていた。その他の地域活動に関しても、おおむね女性の方が参加したことがある人の割合が高かったが、「災害に関係した活動」については男性の方が参加経験のある人の割合が高かった。

次に世代別にクロス集計した結果をTable4に示す。なお本調査のサンプル数は272であったため、10歳刻みで6群(20代、30代、40代、50代、60代、70代)ではなく20歳刻みで3群(20・30代、40・50代、60・70代)とした。p値はフィッシャーの直接確率検定の結果を参照した。

Table4 世代別にみた各種地域活動に対する参加経験

		参加した ことがある	参加した ことがない	参加したことが ないが今後 参加したい	p	
a) 健康や医療サービスに関係した活動	20・30代 (n=52)	13.5%	80.8%	5.8%	0.175	n.s.
	40・50代 (n=88)	22.7%	69.3%	8.0%		
	60・70代 (n=120)	25.8%	61.7%	12.5%		
b) 高齢者を対象にした活動	20・30代 (n=51)	0.0%	100.0%	0.0%	< .0001	***
	40・50代 (n=88)	4.6%	88.6%	6.8%		
	60・70代 (n=119)	13.5%	68.1%	18.5%		
c) 障がい者を対象とした活動	20・30代 (n=51)	2.0%	92.2%	5.9%	0.965	n.s.
	40・50代 (n=85)	1.2%	90.6%	8.2%		
	60・70代 (n=115)	1.7%	92.2%	6.1%		
d) 子どもを対象とした活動	20・30代 (n=52)	26.9%	53.9%	19.2%	< .0001	***
	40・50代 (n=89)	28.1%	64.0%	7.9%		
	60・70代 (n=116)	5.2%	89.7%	5.2%		
e) スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動	20・30代 (n=52)	23.1%	59.6%	17.3%	0.007	**
	40・50代 (n=90)	51.1%	38.9%	10.0%		
	60・70代 (n=120)	37.5%	55.0%	7.5%		
f) まちづくりのための活動	20・30代 (n=53)	35.9%	45.3%	18.9%	0.009	**
	40・50代 (n=89)	62.9%	29.2%	7.9%		
	60・70代 (n=118)	55.9%	38.1%	5.9%		
g) 安全な生活のための活動	20・30代 (n=49)	2.0%	89.8%	8.2%	0.012	*
	40・50代 (n=90)	22.2%	71.1%	6.7%		
	60・70代 (n=119)	18.5%	72.3%	9.2%		
h) 自然や環境を守るための活動	20・30代 (n=51)	5.9%	78.4%	15.7%	0.071	†
	40・50代 (n=89)	20.2%	69.7%	10.1%		
	60・70代 (n=118)	21.2%	71.2%	7.6%		
i) 災害に関係した活動	20・30代 (n=51)	5.9%	72.6%	21.6%	< .0001	***
	40・50代 (n=88)	40.9%	48.9%	10.2%		
	60・70代 (n=117)	50.4%	37.6%	12.0%		
j) 国際協力に関係した活動	20・30代 (n=50)	0.0%	88.0%	12.0%	0.724	n.s.
	40・50代 (n=86)	1.2%	87.2%	11.6%		
	60・70代 (n=111)	0.0%	91.0%	9.0%		

† : $p < .1$ * : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$ (但し Fisherの直接確率検定)

Table4より、高齢者を対象にした活動、子どもを対象とした活動、スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動、まちづくりのための活動、安全な生活のための活動、災害に関係した活動に世代による有意差が見られた。また、自然や環境を守るための活動に傾向差が見られた。高齢者を対象にした活動では、60・70代の参加経験ありの割合が13.5%と最も高く、20・30代は一人も参加したことのある人が居なかった。これに対し子どもを対象とした活動では、参加経験のある人の割合が20・30代で26.9%、40・50代で28.1%とほぼ同程度であり、60・70代の5.2%と20ポイント以上の差があった。

スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動では、参加経験ありの割合が40・50代で51.1%と最も高く、半数以上の人に参加経験があった。60・70代では4割弱、20・30代では2割程度となり、若年層の参加したことのある人の割合が低かった。まちづくりのための活動と安全な生活のための活動もこれと同様に、参加経験ありの割合が40・50代で最も高く、次いで60・70代となり、最も低いのが20・30代であった。特にまちづくりのための活動では、40・50代と60・70代の参加経験ありがいずれも5割以上であったのに対し、20・30代では35.9%と10ポイント以上の差が見られた。

災害に関係した活動は、60・70代の参加経験ありの割合が最も高く、次いで40・50代、20・30代と続き、高齢になるにしたがって参加経験ありの割合が高くなる傾向が見られた。

公園・遊歩道の利用頻度

公園・遊歩道の利用頻度を尋ねる項目として、「あなたは、おゆみ野地域にある公園にどのくらいの頻度で行きますか（あるいは、おゆみ野地域にある遊歩道をどのくらいの頻度で使いますか）。」という設問を用いた。これに対し、「毎日」、「週に数回」、「月に数回」、「年に数回」、「まったく行かない」の5件法で尋ねた。その結果、公園の利用頻度は「毎日」が4.4%、「週に数回」が20.7%、「月に数回」が28.9%、「年に数回」が32.6%、「まったく行かない」が13.3%であった。遊歩道の利用頻度は「毎日」が28.5%、「週に数回」が30.4%、「月に数回」が23.7%、「年に数回」が14.4%、「まったく行かない」が3.0%であった。週に数回以上利用する人の割合は、公園が約25%、遊歩道が60%弱となり、週に数回以上利用する人は遊歩道の方が高かった。

男女別に検討した結果をTable5に示す。p値はフィッシャーの直接確率検定の結果を参照した。

Table5 男女別にみた公園・遊歩道の利用頻度

		毎日	週に数回	月に数回	年に数回	まったく 行かない	P	
公園の利用頻度	男性 (n=109)	6.4%	27.5%	28.4%	23.9%	13.8%	0.045	*
	女性 (n=160)	3.1%	16.3%	29.4%	38.1%	13.1%		
遊歩道の利用頻度	男性 (n=110)	30.9%	31.8%	25.5%	9.1%	2.7%	0.391	n.s.
	女性 (n=159)	27.0%	29.6%	22.6%	17.6%	3.1%		

* : $p < .05$ (但し Fisherの直接確率検定)

Table5より、公園の利用頻度に男女による有意差が見られた ($p < .05$)。男性は「月に数回」が28.4%と最も高く、次いで「週に数回」が27.5%とほぼ同程度の割合が続いた。女性は「年に数回」が38.1%と最も高く、次いで「月に数回」が29.4%と続き、およそ9ポイントの差であった。女性よりも男性の方が公園の利用頻度が高かった。なお遊歩道の利用頻度には男女による割合の違いは見られなかった。

次に世代別に検討した結果をTable6に示す。なおp値は、クロス表のセル数が多いため、フィッシャーの直接確率検定ではなくモンテカルロ法の結果を参照した。

Table6 世代別にみた公園・遊歩道の利用頻度

		毎日	週に数回	月に数回	年に数回	まったく行かない	p	
公園の利用頻度	20・30代 (n=53)	1.9%	13.2%	47.2%	17.0%	20.8%	< .0001	***
	40・50代 (n=92)	1.1%	13.0%	30.4%	37.0%	18.5%		
	60・70代 (n=117)	8.1%	30.1%	19.5%	35.8%	6.5%		
遊歩道の利用頻度	20・30代 (n=53)	22.6%	22.6%	26.4%	24.5%	3.8%	0.013	*
	40・50代 (n=92)	22.2%	28.9%	33.3%	11.1%	4.4%		
	60・70代 (n=117)	35.2%	35.2%	16.0%	12.0%	1.6%		

* : $p < .05$ *** : $p < .001$ (但しモンテカルロ推定値)

Table6より、公園の利用頻度に有意差が見られ ($p < .001$)、遊歩道の利用頻度にも有意差が見られた ($p < .05$)。

公園の利用頻度では、20・30代で最も高かったのが「月に数回」の47.2%であったのに対し、40・50代では「年に数回」が37.0%で最も高く、60・70代も同様に「年に数回」が35.8%と最も高かった。ただし60・70代は週に数回30.1%を占め、年に数回しか利用しない層と週に数回は利用する層とがそれぞれ3割程度を占めていた

遊歩道の利用頻度では、20・30代は毎日・週に数回・月に数回・年に数回が全て20%台と同程度に分布した。40・50代では、「月に数回」が33.3%と最も高く、次いで「週に数回」が28.9%と続いた。60・70代では、「毎日」と「週に数回」が35.2%と同じ割合であった。高齢層は若年層に比べて、遊歩道の利用頻度が有意に高かった。

近所づきあい

次に、近所づきあいに関する基礎集計を行った。これは「あなたは、近隣に次のような方がいらっしゃいますか。」という質問に対して、a) 庭先や道端でよく立ち話をする人、b) 互いの家によく訪問し合う人、c) よくおすそ分けし合う人、d) 家族ぐるみのつきあいをしている人、e) よく一緒に外出するような関係の人の5項目を設定した。これに対し、「たくさんいる」、「数人いる」、「一人二人いる」、「いない」の4件法で尋ねた。結果をTable7に示す。

Table7 近所づきあいに関する基礎集計

		たくさん いる	数人いる	一人二人 いる	いない
a) 庭先や道端で会うとよく立ち話をする人	(n=270)	5.6%	37.8%	30.4%	26.3%
b) 互いの家によく訪問し合う人	(n=270)	1.5%	11.9%	17.8%	68.9%
c) よくおすそ分けし合う人	(n=267)	1.5%	21.3%	39.7%	37.5%
d) 家族ぐるみのつきあいをしている人	(n=270)	0.7%	10.0%	21.5%	67.8%
e) よく一緒に外出するような関係の人	(n=269)	0.4%	9.3%	19.0%	71.4%

その結果、a) 庭先や道端でよく立ち話をする人では、「数人いる」が37.8%と最も高く、次いで「一人二人いる」が30.4%であった。b) 互いの家によく訪問し合う人では、「いない」が68.9%と約7割を占め、次いで「一人二人いる」が17.8%であった。c) よくおすそ分けし合う人では、「一人二人いる」が39.7%と最も高く、次いで「いない」が37.5%であった。d) 家族ぐるみのつきあいをしている人では、「いない」が67.8%と7割弱を占めており、次いで「一人二人いる」が21.5%だった。e) よく一緒に外出するような関係の人では、「いない」が71.4%と7割以上を占め、次いで割合が高かったのは「一人二人いる」の19.0%だった。立ち話をする程度の近所づきあいのある人は半数を超えるが、家族を含めた付き合いのある人はおよそ3割程度にとどまった。

次に男女別に検討した結果をTable8に示す。p値はフィッシャーの直接確率検定の結果を参照した。

Table8 男女別にみた近所づきあい

		たくさん いる	数人いる	一人二人 いる	いない	p	
a) 庭先や道端で会うとよく立ち話をする人	男 (n=110)	3.6%	36.4%	25.5%	34.6%	0.069	†
	女 (n=159)	6.3%	39.0%	34.0%	20.8%		
b) 互いの家によく訪問し合う人	男 (n=110)	0.0%	8.2%	20.0%	71.8%	0.201	n.s.
	女 (n=159)	1.9%	14.5%	16.4%	67.3%		
c) よくおすそ分けし合う人	男 (n=108)	0.9%	21.3%	35.2%	42.6%	0.071	†
	女 (n=158)	1.9%	20.9%	43.0%	34.2%		
d) 家族ぐるみのつきあいをしている	男 (n=110)	0.0%	10.0%	21.8%	68.2%	0.489	n.s.
	女 (n=159)	1.3%	10.1%	20.8%	67.9%		
e) よく一緒に外出するような関係の人	男 (n=109)	0.0%	6.4%	13.8%	79.8%	0.854	n.s.
	女 (n=159)	0.6%	11.3%	22.0%	66.0%		

†: $p < .1$ (但し Fisherの直接確率検定)

Table8より、「庭先や道端で会うとよく立ち話をする人」と「よくおすそ分けし合う人」に傾向差が見られた ($p < .1$)。「庭先や道端で会うとよく立ち話をする人」は、男性では「数人いる」が36.4%で最も高く、次いで「いない」がほぼ同程度の34.6%であった。女性では「数人いる」が39.0%で最も高く、次いで「一人二人いる」が34.0%であった。男性と女性で「いない」の割合の差が約14ポイントあり、男性よりも女性の方が庭先や道端で会うとよく立ち話をする人が多少なりとも居ることが分かった。

「よくおすそ分けし合う人」では、男性は「いない」が42.6%と最も高かったのに対し、女性は「一人二人いる」が43.0%と最も高かった。

Table9は世代別に検討した結果である。p値はフィッシャーの直接確率検定の結果を参照した。

Table9 世代別にみた近所づきあい

		たくさん いる	数人いる	一人二人 いる	いない	p
a) 庭先や道端で会うとよく立ち話をする人	20・30代 (n=53)	1.9%	18.9%	20.8%	58.5%	< .0001 ***
	40・50代 (n=92)	7.6%	39.1%	33.7%	19.6%	
	60・70代 (n=123)	4.1%	45.5%	32.5%	17.9%	
b) 互いの家によく訪問し合う人	20・30代 (n=53)	0.0%	9.4%	7.6%	83.0%	0.034 *
	40・50代 (n=92)	0.0%	17.4%	16.3%	66.3%	
	60・70代 (n=123)	2.4%	8.9%	22.8%	65.9%	
c) よくおすそ分けし合う人	20・30代 (n=53)	0.0%	5.7%	34.0%	60.4%	0.102 n.s.
	40・50代 (n=92)	1.1%	27.2%	40.2%	31.5%	
	60・70代 (n=121)	2.5%	23.1%	42.2%	32.2%	
d) 家族ぐるみのつきあいをしている人	20・30代 (n=53)	1.9%	3.8%	20.8%	73.6%	0.002 **
	40・50代 (n=92)	0.0%	9.8%	22.8%	67.4%	
	60・70代 (n=123)	0.8%	12.2%	20.3%	66.7%	
e) よく一緒に外出するような関係の人	20・30代 (n=53)	1.9%	5.7%	9.4%	83.0%	0.529 n.s.
	40・50代 (n=92)	0.0%	13.0%	20.7%	66.3%	
	60・70代 (n=123)	0.0%	8.1%	21.1%	70.7%	

* : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$ (但し Fisherの直接確率検定)

Table9より、「庭先や道端で会うとよく立ち話をする人」、「互いの家によく訪問し合う人」、「家族ぐるみのつきあいをしている人」にそれぞれ有意差が見られた。「庭先や道端で会うとよく立ち話をする人」では、20・30代では「いない」の割合が最も高かったのに対し、40・50代および60・70代では「数人いる」の割合が最も高かった。「互いの家によく訪問し合う人」では、いずれの世代も「いない」の割合が最も高かったが、20・30代が8割以上であったのに対し、40・50代および60・70代では6割台に留まった。「家族ぐるみのつきあいをしている人」は、いずれの世代も「いない」が最も高かったが、20・30代は7割以上であったのに対し、40・50代と60・70代は6割台となった。いずれの項目も、年齢が上がるにしたがって「いる」の割合が高くなっていく傾向が見られ、庭先や道端で立ち話をしたり、おすそ分けしたりと、さほど時間を取られないような近所づきあいの方が「いる」の割合が高くなる傾向が見られた。

以上の基礎的分析から、次のことが明らかとなった。(1) 地域活動に対する参加経験は、全体的に参加したことがない人の割合が高かったが、男女による差や世代による差がみられた。男女別にみたところ、おおむね女性の方が参加経験が高かった。世代別に検討した結果、おおむね高齢になるにしたがって参加経験が高くなっていたが、子どもを対象とした活動やスポーツ等の活

動、まちづくりのための活動は40・50代の参加経験が高かった。(2) 公園・遊歩道の利用頻度は、公園のみ性別による違いがあり、女性よりも男性の方が利用頻度高かった。また公園・遊歩道のいずれも世代による違いが見られ、高齢になるにしたがって利用頻度が高くなった。(3) 近所づきあいは、ほとんどの項目に世代による違いがあり、いずれも高齢になるにしたがって近所づきあいの相手がいる割合が高くなった。また、よく立ち話をする人の割合に性別による違いがあり、男性よりも女性の方が近所によく立ち話をする相手が居ることが分かった。

3-2. 地域愛着度の尺度化

次に、地域愛着度の尺度を作成する。

地域への愛着を尋ねる項目として次のa～kの11項目を用いた。a) このまちではリラックスできる、b) 雰囲気や土地柄が気に入っている、c) このまちを歩くのは気持ちよい、d) お気に入りの場所がある、e) 近所に友達や知り合いがいる、f) 自分のまちという感じがする、g) このまちが好きだ、h) まちに思い出がある、i) まちに自分の居場所がある、j) このまちは住みやすい、k) このまちにずっと住みたい、である。これについて調査対象者は「あてはまる」から「あてはまらない」までの4件法で回答した。「あてはまる」を4点、「どちらかという」とあてはまる」を3点、「どちらかという」とあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点とした。

これら11項目について、因子分析（プロマックス回転）を行った。結果をTable10に示す。

Table10 地域愛着度尺度の因子分析結果

	I	II
c) このまちを歩くのは気持ちよい	.850	.359
a) このまちではリラックスできる	.838	.369
b) 雰囲気や土地柄が気に入っている	.887	.471
j) このまちは住みやすい	.821	.581
g) このまちが好きだ	.849	.668
k) このまちにずっと住みたい	.783	.643
d) お気に入りの場所がある	.617	.524
h) まちに思い出がある	.432	.836
e) 近所に友達や知り合いがいる	.340	.781
i) まちに自分の居場所がある	.511	.852
f) 自分のまちという感じがする	.642	.802
因子間相関	.662	

分析の結果、2因子が抽出された。第1因子は、「c) このまちを歩くのは気持ちよい」、「a) このまちではリラックスできる」、「b) 雰囲気や土地柄が気に入っている」、「j) このまちは住みやすい」、「g) このまちが好きだ」、「k) このまちにずっと住みたい」、「d) お気に入りの場所がある」までの7項目とした。このうち、c)～k) までは第1因子の負荷量がおよそ0.8程

度を示したのに対し、「お気に入りの場所がある」は第1因子が0.617, 第2因子が0.524で両者の差が0.1未満となったが, 他の第2因子の項目 (h, e, i, f) の負荷量と比較するとおよそ0.3程度の差があったため, 負荷量の高い第1因子に含むこととした。これらの項目は「まちを歩く」や「雰囲気や土地柄」, 「お気に入りの場所」といった, 主に地域の物理的環境に対する愛着に関する項目が多く含まれていることから, 「地域愛着 (物理的環境)」と命名した。

第2因子として抽出された項目は, 「h) まちに思い出がある」, 「e) 近所に友達や知り合いがいる」, 「i) まちに自分の居場所がある」, 「f) 自分のまちという感じがする」の4項目であった。これらは「思い出がある」や「友達や知り合いがいる」, 「自分の居場所がある」といった, 地域の人々とのつながりや地域に対する情緒的感情が含まれている。これらは, 第1因子が物理的環境への愛着であったことを鑑みると, 地域の社会的環境に対する愛着に関する項目と考えられることから, 「地域愛着 (社会的環境)」と命名した。なお, 第1因子の α 係数は.901, 第2因子の α 係数は.839であり, 尺度の信頼性は十分担保された。以上の結果から, 地域愛着は物理的環境と社会的環境の2因子から構成されるものとした。

地域愛着 (物理的環境) と地域愛着 (社会的環境) の男女別の検討結果をTable11に, 世代別の検討結果をTable12に示す。

Table11 地域愛着度尺度のt検定結果

		M	SD	t 値	p 値	
地域愛着 (物理的環境)	男性 (n=111)	3.26	0.59	0.02	0.988	n.s.
	女性 (n=160)	3.26	0.59			
地域愛着 (社会的環境)	男性 (n=111)	2.72	0.78	-2.25	0.025	*
	女性 (n=160)	2.93	0.75			

* : $p < .05$

Table11より, 地域愛着 (物理的環境) は男女差が見られなかったが, 地域愛着 (社会的環境) には男女差が見られた ($t(271) = -2.25, p < .05$)。男性の平均値が2.72, 女性の平均値が2.93となり, 男性よりも女性の方が地域愛着 (社会的環境) の得点が有意に高かった。

Table12 地域愛着度尺度の分散分析結果

		M	SD	F 値	p 値	
地域愛着 (物理的環境)	20・30代 (n=53)	3.19	0.63	0.69	0.504	n.s.
	40・50代 (n=92)	3.24	0.54			
	60・70代 (n=125)	3.30	1.85			
地域愛着 (社会的環境)	20・30代 (n=53)	2.67	0.88	1.78	0.171	n.s.
	40・50代 (n=92)	2.89	0.77			
	60・70代 (n=125)	2.89	1.85			

またTable12より, 世代別に検討した結果, 地域愛着 (物理的環境) ならびに地域愛着 (社会的環境) のいずれにも世代による得点の差は見られなかった。

3-3. 地域愛着が促す地域活動への参加

どのような要因が地域愛着を規定するか、また地域愛着はどのような地域活動への参加を促すかを検討するため、次の2つの分析を行った。

第一に、地域の物理的環境および社会的環境の接触が地域愛着度を規定するか否かを検討する。物理的環境要因として公園・遊歩道の利用頻度を設定し、社会的環境要因として近所づきあいを設定する。公園・遊歩道の利用頻度と近所づきあいを独立変数、地域愛着度を従属変数とする重回帰分析を行った。

第二に、地域愛着がどのような地域活動への参加を高めるかを検討するため、地域愛着を独立変数、各種地域活動の参加の有無を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。

分析に用いた変数の数量化の方法は次の通りである。

公園・遊歩道の利用頻度（2項目）

公園の利用頻度と遊歩道の利用頻度を尋ねる各項目について、「毎日」を5点、「週に数回」を4点、「月に数回」を3点、「年に数回」を2点、「まったく行かない」を1点とし、2項目を合算した（ $\alpha = 0.61$ ）。

地域愛着度

3-2にて作成した通り、地域愛着（物理的環境）と地域愛着（社会的環境）とに分けて扱った。

近所づきあい（5項目）

「たくさんいる」を4点、「数人いる」を3点、「一人二人いる」を2点、「いない」を1点とし、5項目を合算した（ $\alpha = 0.83$ ）。

地域活動への参加（10項目のうち8項目）

a) 健康や医療サービスに関係した活動、b) 高齢者を対象にした活動、c) 障がい者を対象とした活動、d) 子どもを対象とした活動、e) スポーツ・文化・芸術・学術に関係した活動、f) まちづくりのための活動、g) 安全な生活のための活動、h) 自然や環境を守るための活動、i) 災害に関係した活動、j) 国際協力に関係した活動の10種類の地域活動について、「参加したことがある」、「参加したことはない」、「参加したことはないが今後参加したい」のうち、「参加したことがある」に1点を与え、不参加を意味する「参加したことはない」と「参加したことはないが今後参加したい」に0点を与えた。ただし、c) 障がい者を対象とした活動とj) 国際協力に関係した活動については、参加経験ありの人数が10人未満であったため、この後の分析からは除外した。

3-3-1. 地域愛着を規定する要因の検討

公園・遊歩道の利用頻度と近所づきあいを独立変数、地域愛着（物理的環境）と地域愛着（社会的環境）を従属変数とする重回帰分析を行った。デモグラフィック変数として性別（男性 = 1、

女性 = 0), 配偶関係 (配偶あり = 1, 配偶なし = 0), 居住年数, 子どもの有無 (あり = 1, なし = 0) を投入した。変数選択はステップワイズ法を用いた。結果を Figure 1 に示す。

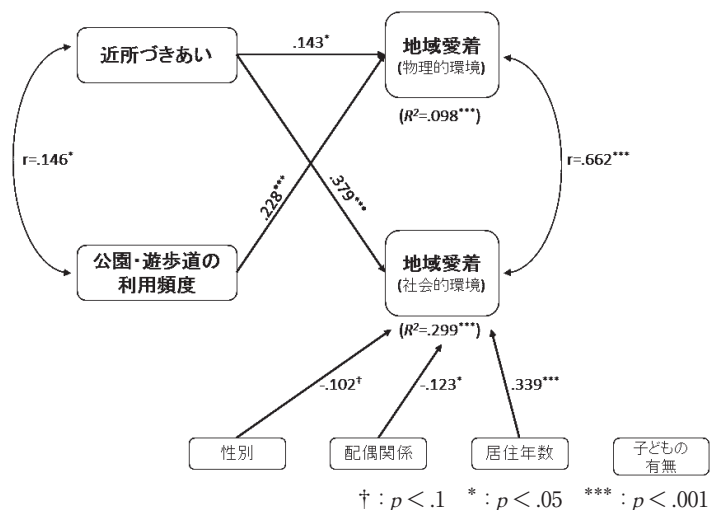


Figure1 地域愛着を従属変数とする重回帰分析結果

Figure1より, 地域愛着 (物理的環境) は近所づきあいと公園・遊歩道の利用頻度が有意に影響を与えており, 近所づきあいがある, あるいは公園・遊歩道の利用頻度が高いと地域愛着 (物理的環境) が高くなることが示された。特に地域の物理的環境との接触の程度を意味する公園・遊歩道の利用頻度の標準化回帰係数が.228となり, 近所づきあいよりも高い係数を示した。デモグラフィック変数はどれも有意な影響を与えていなかった。モデルの適合度を示す調整済み R^2 は.098となり, 説明力は高くなかった。

地域愛着 (社会的環境) は, 近所づきあいが有意に影響を与えており, 近所づきあいがある人は地域愛着 (社会的環境) が高くなることが示された。デモグラフィック変数は, 性別, 配偶関係, 居住年数が有意に影響を与えており, 女性であること, 未婚であること, 居住年数が長いと地域愛着 (社会的環境) が高くなった。

3-3-2. 地域愛着によって参加を促される地域活動の特徴

地域愛着 (物理的環境), 地域愛着 (社会的環境) を独立変数, 各種地域活動の参加の有無を従属変数とするロジスティック回帰分析を行った。各種地域活動は, 先ほど述べたように, 障がい者を対象とした活動と国際協力に関係した活動を除く8種類である。

以上の変数を用いて、二項ロジスティック回帰分析を行った。地域愛着の2因子はZスコアに変換し、各種地域活動の参加は参加ありを1、参加なしを0とした。デモグラフィック変数として、性別（男性 = 1、女性 = 0）、配偶関係（既婚 = 1、未婚 = 0）、子どもの有無（あり = 1、なし = 0）を投入し、居住年数は15年未満（n = 92）、15年以上25年未満（n = 91）、25年以上（n = 89）の3群にし、ダミー変数として投入した。結果をTable13に示す。

Table13 ロジスティック回帰分析結果

	健康・医療サービス		スポーツ・文化・ 芸術・学術		まちづくり		安全な生活	
	調整オッズ比	(95%信頼区間)	調整オッズ比	(95%信頼区間)	調整オッズ比	(95%信頼区間)	オッズ比	(95%信頼区間)
地域愛着度								
物理的環境への愛着	0.73	(0.44 - 1.20)	0.70 †	(0.47 - 1.05)	0.74	(0.50 - 1.08)	0.70	(0.40 - 1.23)
社会的環境への愛着	2.58 ***	(1.48 - 4.51)	2.65 ***	(1.68 - 4.19)	2.54 ***	(1.64 - 3.94)	1.93 *	(1.02 - 3.64)
性別 (男性 = 1, 女性 = 0)	0.83	(0.43 - 1.59)	1.37	(0.77 - 2.44)	0.65	(0.37 - 1.14)	1.41	(0.68 - 2.93)
配偶関係 (あり = 1, なし = 0)	1.38	(0.44 - 4.31)	6.72 **	(1.97 - 22.87)	4.64 **	(1.59 - 13.53)	6.96 †	(0.86 - 56.30)
子どもの有無 (あり = 1, なし = 0)	0.53	(0.19 - 1.44)	0.57	(0.26 - 1.27)	0.97	(0.45 - 2.12)	0.13 †	(0.02 - 1.01)
居住年数								
15年～25年未満	2.06	(0.87 - 4.86)	2.15 *	(1.06 - 4.37)	2.70 **	(1.31 - 5.55)	5.62 **	(1.54 - 20.42)
25年以上	1.44	(0.58 - 3.57)	0.63	(0.29 - 1.34)	1.00	(0.48 - 2.12)	3.68 †	(0.99 - 13.69)
$\chi^2=29.195^{***}$ $\chi^2=48.065^{***}$ $\chi^2=54.624^{***}$ $\chi^2=34.068^{***}$ $-2\log L = 249.282$ $-2\log L = 303.934$ $-2\log L = 303.949$ $-2\log L = 198.421$ Hosmer & Lemeshow- $R^2 = .676$ Hosmer & Lemeshow- $R^2 = .297$ Hosmer & Lemeshow- $R^2 = .135$ Hosmer & Lemeshow- $R^2 = .161$								
	子ども対象		災害		高齢者対象		自然・環境	
	調整オッズ比	(95%信頼区間)	調整オッズ比	(95%信頼区間)	調整オッズ比	(95%信頼区間)	オッズ比	(95%信頼区間)
地域愛着度								
物理的環境への愛着	0.83	(0.48 - 1.42)	0.81	(0.53 - 1.23)	2.20	(0.50 - 8.24)	1.02	(0.61 - 1.70)
社会的環境への愛着	2.86 ***	(1.58 - 5.17)	1.79 *	(1.13 - 2.83)	1.71	(0.60 - 4.85)	1.52	(0.89 - 2.60)
性別 (男性 = 1, 女性 = 0)	0.82	(0.38 - 1.76)	1.42	(0.78 - 2.57)	0.57	(0.20 - 1.58)	0.63	(0.31 - 1.30)
配偶関係 (あり = 1, なし = 0)	1.72	(0.44 - 6.78)	11.52 **	(2.47 - 53.76)	—	—	7.13 †	(0.91 - 55.96)
子どもの有無 (あり = 1, なし = 0)	2.71 *	(1.14 - 6.40)	0.30	(0.12 - 0.77)	0.29	(0.04 - 2.38)	0.15 *	(0.03 - 0.69)
居住年数								
15年～25年未満	0.95	(0.41 - 2.24)	3.98 ***	(1.81 - 8.76)	0.66	(0.12 - 3.52)	1.13	(0.45 - 2.83)
25年以上	0.30 *	(0.11 - 0.86)	2.76 *	(1.23 - 6.22)	3.67 †	(0.94 - 14.36)	1.03	(0.40 - 2.62)
$\chi^2 = 34.848^{***}$ $\chi^2 = 57.913^{***}$ $\chi^2 = 24.697^{***}$ $\chi^2 = 23.115^{**}$ $-2\log L = 203.585$ $-2\log L = 282.784$ $-2\log L = 121.069$ $-2\log L = 218.785$ Hosmer & Lemeshow- $R^2 = .114$ Hosmer & Lemeshow- $R^2 = .057$ Hosmer & Lemeshow- $R^2 = .927$ Hosmer & Lemeshow- $R^2 = .453$								

† : $p < .1$ * : $p < .05$ ** : $p < .01$ *** : $p < .001$

Table13より、健康・医療サービス、スポーツ・文化・芸術・学術、まちづくり、安全な生活、子ども対象、災害の活動に対して、地域愛着（社会的環境）が有意に影響を与えていた。オッズ比は子ども対象、スポーツ・文化・芸術・学術、健康・医療サービス、まちづくり、安全な生活、災害の順に高く、いずれも地域愛着（社会的環境）が高いとそれぞれの地域活動へ参加する

傾向がみられた。デモグラフィック変数は健康・医療サービス以外の地域活動に配偶関係と居住年数が有意に影響を与え、配偶関係がある、または居住年数が15年から25年であった場合に、地域活動へ参加する傾向がみられた。また子ども対象の活動には、子どもの有無と居住年数（25年以上）に有意差がみられ、子どもがいると参加する傾向がみられた。

これとは対照的に、高齢者対象の活動と自然・環境を守るための活動には、いずれの地域愛着も有意な影響を及ぼしていなかった。デモグラフィック変数は配偶関係と子どもの有無が自然や環境を守るための活動に有意な影響を与えていた。高齢者対象の活動は、唯一居住年数（25年以上）が10%水準で有意な影響を与えていた。なお、高齢者対象の活動において「配偶者なし」で「参加経験あり」が1人もいなかったことから、配偶関係を変数から除外した。

4. 考 察

本研究は、地域愛着の規定因として当該地域の物理的環境要因と社会的環境要因が影響を与えるか否かと、地域愛着がどのような地域活動への参加を促進するかを探索的に検討した。まず地域愛着の規定因の分析結果から、地域愛着（物理的環境）に対しては、「公園・遊歩道の利用頻度」（物理的環境との接触）と「近所づきあい」（社会的環境との接触）が有意な影響力を持っていた。地域愛着（社会的環境）に対しては、「近所づきあい」（社会的環境との接触）のみが有意な影響力を持っていた。このことから、おゆみ野地域においては、公園・遊歩道といった地域の物理的環境に接触することで、地域の物理的環境への愛着が高まった。また、近所づきあいといった地域の社会的環境と接触することで、地域の物理的環境ならびに社会的環境への愛着が高まった。

次に地域愛着がどのような地域活動への参加を促進するかを検討した結果、地域愛着（社会的環境）は子どもを対象とした活動や健康・医療サービス、スポーツ・文化・芸術・学術、まちづくり、安全な生活、災害といった地域活動の参加を高める傾向があった。高齢者を対象や自然や環境を守るための活動といった地域活動群は地域愛着の影響は見られず、また地域愛着（物理的環境）は唯一スポーツ・文化・芸術・学術のみに傾向差があったのみで、ほとんどの地域活動の参加に影響がなかった。

以上の分析の結果はFigure2に示す通りである。

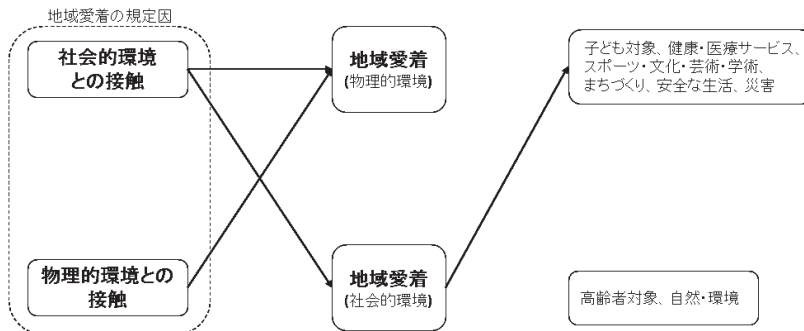


Figure 2 重回帰分析およびロジスティック回帰分析より推定される因果構造

地域への愛着に関しては、地域愛着（物理的環境）が物理的環境との接触と社会的環境との接触の両方の影響を受けることから、近所づきあいを促進するような、あるいは公園・遊歩道を利用するような地域活動があることで、地域の物理的環境への愛着が高まることが考えられる。このことは、鈴木ら（2008b）が指摘するように、地域への愛着には「風土とのかかわり」との関連が示唆されるだろう。当該地域における自然物や人工物、地域社会の人々などあらゆるものに対して、見たり、触れたり、手を加えたり、知るようになったりするといったかかわりを通して、地域への愛着が育まれることが想定される。また地域愛着（社会的環境）は、社会的環境との接触の影響を受けることから、近所づきあいといった地域の人々との交流があることで地域の社会的環境への愛着が高まることが考えられる。デモグラフィック変数では、性別、配偶関係、居住年数が地域愛着（社会的環境）に影響があり、居住年数が長いと地域の社会的環境への愛着が高かった。居住年数は年齢と相関があったため（ $r = .645, p < .001$ ）、居住年数が長い、すなわち高齢層の人々は、若年層と比べて地域の人々とのつながりが醸成されていることが考えられる。その一方で、引地ら（2009）も述べたように、物理的環境の評価や社会的環境の評価は、居住年数以上に地域への愛着を増すことから、若年層の地域への愛着を高めるためには、これらの評価を高める要因を発見することが必要となるだろう。

地域活動への参加経験に関しては、地域愛着（社会的環境）が健康・医療サービス、スポーツ・文化・芸術・学術、まちづくり、安全な生活、災害、子ども対象の活動に影響を与えていた。子どもを対象とした活動は、子どもがいる人の参加が高かったことから参加者は子育て世代が中心であろう。そうした人々は、保育園や幼稚園の送り迎え、公園で子どもを遊ばせているときなど、同じ子育て中の人々と交流の機会があることが想定される。よって、近所づきあいがあ→地域愛着（社会的環境）が高まる→子ども対象の地域活動へ参加する、といった因果関係が考えられる。一方、それ以外の地域活動は地域愛着（社会的環境）のほかに配偶関係（配偶者あり）や居住年数（15年以上25年未満）の影響を受けていた。これらの地域活動は、健康・医療

サービスやスポーツ・文化・芸術・学術、まちづくりといった現在の地域生活をよりよくするような活動が多く含まれていることから、地域の社会的環境に愛着があるとそのような地域活動への参加が促進され则认为られる。

最後に本研究の限界について述べておく。本研究では、地域愛着の規定因を検討するにあたり、地域の物理的環境との接触として公園・遊歩道の利用頻度を、ならびに社会的環境との接触として近所づきあいを取り上げたが、当然のことながら地域の物理的環境や社会的環境は、公園・遊歩道や近所づきあいに限ったものではない。今後は、さまざまな種類の物理的環境あるいは社会的環境の影響を検討する必要があるだろう。

文 献

- Brown, B., Perkins, D. D., & Brown, G. 2003 Place attachment in a revitalizing neighborhood: Individual and block levels of analysis. *Journal of environmental psychology*, 23(3), 259-271.
- 引地博之・青木俊明・大渕憲一 2009 地域に対する愛着の形成機構—物理的環境と社会的環境の影響—土木学会論文集D, 65(2), 101-110.
- 石盛真徳 2004 コミュニティ意識とまちづくりへの市民参加：コミュニティ意識尺度の開発を通じて コミュニティ心理学研究, 7(2), 87-98.
- 倉沢 進 2002 コミュニティ論 放送大学振興会
- 鈴木春菜・藤井 聡 2008a 地域愛着が地域への協力行動に及ぼす影響に関する研究 土木計画学研究・論文集, 25(2), 357-362.
- 鈴木春菜・藤井 聡 2008b 「消費行動」が「地域愛着」に及ぼす影響に関する研究 土木学会論文集D, 64(2), 190-200.

What Community Activities are Tended to Participate by Place Attachment?

Yuki WATANABE

Previous studies have revealed that “place attachment” affect participation of community activities. In this study, we investigated the factors that affect the participation in community activities in the Oyumino area in Chiba Prefecture Chiba city Midori district.

Multiple regression analysis and logistic regression analysis were used. First, we analyzed whether people who contact with community environments (neighborhood relationships as social factors and the frequency of use of parks and promenades as physical factors) regulate place attachments which is configured social environments and physical environments. Results showed that, place attachment (for physical environment) was influenced by both physical factors and social factors of the area, and place attachment (for social environment) was affected by local social factors.

In addition, we analyzed what type of community activities were encouraged place attachment. Participation in community activities was mainly influenced by place attachment (for social environment), and strongly influenced community activities that make current life better.

Keywords: community activities, place attachment, neighborhood relationship park and promenade